

## 香港のペスト(1) 明治27年の辞令

薬学雑誌 1894年度 p 550

薬誌には会員、関係者の叙任、辞令欄がある。明治27年6月号に

(各通) 内務技師医学博士 北里柴三郎  
医科大学教授医学博士 青山胤通

香港に於いて流行する伝染病調査の為に派遣被仰付  
(5月28日内閣)(5月29日官報)

とある。

この辞令を見て思ったのは、既にこの年、2人が偉すぎることである。

北里はコッホのもとで世界的な成果を上げ、ケンブリッジ大はじめ多くの研究所から好条件で招へいされたが、明治25年5月に帰国した。外国人として初めてプロシア政府からプロフェッソルの称号をもらったほどの細菌学の世界的大家である。この年41歳。一方、青山は明治20年にドイツ留学から帰国して東大内科教授、25年付属病院長、この年36歳。明治34年から大正6年に死ぬまで医学部長を務めた。

普通、派遣というのは偉い人を1人団長とし、あとは教室員とか若い人が占めるものだ。どうして2人行くことになったのだろう。北里は留学中に東大緒方正規の脚気菌(本欄47巻11号で紹介)を誌上で否定したこともあり、東大との関係

が上手くなく、帰国後も大学にいる場所はなかったと種々の本にある。しかし福沢諭吉の援助で、内務省に籍を置いたまま研究所を作ることができた。内務省が世界的細菌学者の北里派遣を決め、もしここで大発見でもされたら、文部省、東大の面目が潰れてしまう。つまり彼らが対抗して青山グループ派遣を決めたのだろうか。

ペスト(黒死病)は14世紀にヨーロッパ人口の3分の1、2,000万人以上の命を奪い、その後も18世紀まで何度も大流行し、欧州だけで5,000万人が死んだとされる。それが日本の近く香港、広東で発生したのだ。19世紀は、国境に関係なく広がる伝染病の病原菌探しに、国家の威信をかけたようなところもあった。この十年ほど前、1883年のエジプトコレラのときは、仏パスツール研と独コッホのチームが争ってドイツに軍配が上がった。

香港ペストの場合も、単純に日本政府が国威発揚のため専門の違う(細菌学と内科)最高の2人を派遣しただけかもしれない。もっとも、帝大側も傍観しているわけにもいかなかったのだろう。

小林 力